

INTERLUDE

[DEUSLAVE-01]

《START UP: BATTLE MOBILE》

《COMBAT MODE TYPE-G: GUN BUSTER》

《SET UP: BUSTER RIFLE》

《ATTACK GAUGE: MB-pixel》

《CAUTION!》

《Metatron level increase》

《Potential rate surge》

《Space-time disappearance》

《Real erosion》

《Singular hole appearance》

《Scanning impossible》

《Actual measurement……∞》

《Target……UNKNOWN!》

少女の射す銃口——

夜天、宙空に浮遊する黒影。

雲間より零れる蒼月の光に濡れて、翅を広げた天使は、雪に埋もれた銀世界、眼下の闇に魔弾の行く末を見定める。

漆黒の夜気へと突き刺す、白銀の銃身^{パレレ}。

身の丈ほどもある巨大な狙撃銃^{ライフル}は、少女の左腕を覆うように、その肩の上まで伸びている。

可憐な細腕には似合わない重厚。

乙女の服装^{シルエット}には不釣り合いな重装^{アンバランス}。

狙い定める銃口——

《Final safety Release》

《Load Cartridge: SLOT-01 『Album bullet』》

—— 標的。

壁を隔てた闇の奥、牙を剝くこの世の真実は、破滅を齎す地獄^{インフェルノ}。

《Magitron accelerate》

《Generator Starting》《Potential increase》……

—— 照準。

セカイを侵す、無秩序の鱗片。

《Precision Shooting Control System》

《Full Auto Geographic Model》

《3-D Euddean Field》

《Optic Sight: Surgical Analytic aiming》

P S C システム——目標の誤差修正。

少女の視野・意識に映る光景は、線型で模られた幾何学模様。精密射撃を可能とする、座標空間と重ね合わされている。

射程—距離25・3メートル／伏角補正4・2度。

引き金に指を。

視界に重なる……『』を中央に。

刹那——時が凍り付く一瞬。

《BUSTER RIFLE: ATK 800MB》>>>>《FIRE!》

“マズルフラッシュを
“反逆の聖火!”

吼え猛る魔銃の咆哮。

月下の光砕。闇夜を突き抜けて、一縷の閃光が流れ落ちる。

光速の魔弾はセカイを引き裂き、その飛跡は時空を焦がす。

魔導の軌跡——夜影に刻まれた“聖痕”の輝き。

其の鋒は魔滅の矛。

刺し穿つ鏃がセカイの敵を狙い撃つ。

放たれた光槍は神をも殺す一撃。

天より堕ちた悪魔を滅ぼす、凶祓いの福音——

魔滅尖光。

物理接触。

爆発轟音。

残骸崩落。

魔弾直撃。

相殺干渉。

目標喪失。

……………作戦失敗。

初戦——一人のニンゲンを犠牲にする敗北。

壁には大穴が穿たれ、爆砕された瓦礫が崩れ落ちていく。
ることすら叶わなかった。

穴の向こうには誰もいない。

顕現れていた敵の存在は、今や跡形もなく消え去っている。

……ただ一つ。

セカイに致命的な矛盾を残して――

少女の殺り逃がした魚は真実、セカイの危機たる大物だった。

足下には箱庭の樂園、雪に覆われた大地が広がる。

其処には倒壊した建物の残骸と、

それを見下ろす破壊の天使。

巨大な鏡を片手に背後の月、

星空を背負い立つ、閃光の戦闘姫

『M B 砲』の攻撃では、傷どころか、目標に当て

■序

星空を背負い立つ、閃光の戦闘姫

——其処には翅を広げた少女が独り、
月に臨むように飛んでいた。

十

——夜半、自室にて。

ベッドの上で横になって、ぐろり

仰向けの体勢で両腕を目の前へ。その手に持った
マンガ本が室内の蛍光を遮ると、おれの顔面に陰影
を貼り付ける。紙面の大ゴマには翼を広げた少女が
踊り、その左腕に構えた巨大な銃は、自らの破壊力
を誇示するよう、銃口を一杯に拡げていた。

——倒壊した建物の残骸と、

それを見下ろす破壊の天使。

巨大な鏡を片手に背後の月、

ページを捲る。その時、

着信音!

震える振動音。

マンガの世界に没頭していたおれの耳元まで、小
煩く響いて来る空気振動。カタカタと机を叩く音。
それでおれは読書の中断を余儀なくされた。クビだ
け持ち上げて震源探索、視線はあちら、音の鳴る方
へ——すると机の上では陸揚げされたエビのよう
に、ビチビチと弾んでいる携帯電話が目に残る。
そのまま飛び跳ね続けられ机の上から身投げしそ
うだ。

腹筋!

鼻から洩らす腹式呼吸。上半身、腹の力で起き上
がると、お尻を軸に四半回転九〇度ターン。床へと
脚を下ろす、ベッドに腰掛ける体勢に移行すると、
そのまま隣にある机の上に手を伸ばした。上から押

さえ付けるようにして、跳ね回る携帯ポキを捕まえる。

GETだぜ！

おれは手にした二つ折りのそれをワン・タッチ。

ボタン一つで「くはあ」と開く。未だに震えるそのボディを、指先一つで止めてやった。

液晶画面。

『えいごのしゅくだい、オワッタ……』

「……………」

〔また中途半端意味不明なメールを……〕

コレは疑問文か？ と、しばらくの間……送られてきた文字列と睨み合う。この平仮名ばかりを多用し、尻切れトンボのようにハンパな文面は「ゴゴゴマリアー——知り合っつてからの年月が、その人物との関係の親密さに比例するならば、親友と呼んでも差し支えないほどに長い付き合いのある悪友だ。

このメールはおれに『英語の宿題は終わった

か？』と訊きたいのだろうか？

それとも、宿題が出来ずに『オワッタ』のはマリ

ヤの方なのか……

「……………」

三秒の黙禱もくとう——もとい、黙考もくこう。然るのち可能性が高いのは後者の方、と当たりを付けたところで。

〔——はて？〕

と首を捻る。

思い出すのは今日までの連休、休日の日々ホリデイ。

自分にそんな宿題なるモノをやった記憶など……

全くこれっぽちもミジンコほどにもないことに思い

至る時スデニ遅シ——

〔やっべえ——!!〕

ガラスに映る顔色じしょんも真っ青。

おれは跳ねるように慌てて、飛び付くように机に向かった。

突貫工事。ドリルで穴でも開けるかのようにして、引き出しの中ほじくを穿る。しかし掘り返されるのは雑誌

やマンガの類たぐいばかりで、肝心の宿題ソツはドコにも見当たらない。

「ふむ、もしかして……」

——鞆の中か？

そう思い当たり、椅子の上から身を乗り出して、机の横に下げた鞆を取ろう——として触れる寸前、眉ひまを顰めてその手を止める。

「……………」

鞆の表面。そこにはうっすらと降り積もった雪化粧ホコリ。

そーいえば……

「連休中は一度も、鞆などに触れたことがなかったよーな……」

顔を近づけて——ぴゅーつと吹く一息。おれが鞆に降り積もった雪ホコリに向かって息を吹きかけると、

「**フツッ、ふもっふ**——」

それは忘れていたことへの報復か。

鞆の上から宙へと舞い上がったホコリは、ぐる

り、と宙返り、それからちようどおれの顔オモて目掛けて軟着陸。咽むせびながらも、**はたはた**、**しっしっ**と手を振って——おれはそれらを目の前から払い除ける。

ホコリの襲撃を受けて手にした鞆。

見た目のわりには意外？と軽いソレを、おれは机の上に引つ張り上げて——

空カラン という印象。

もしかして……と思ひ、中を檢あめてみると。

——そこには、**ふ**でば**こ**が一つ。

ポツンと虚しく取り残されているだけでした。

「……………」

事此處コトココニ至リテ漸ヨレク悟ル……

「オワツテいたのは——おれの方、ダツタノカ……」

中身の無い空の鞆を前にして、おれはガツクリ。

肩を落として項垂れる。

外に出ると宙のまにまに、輝く星々がキラッ☆とおれのことを出迎えた。

少し冷ヤリと肌寒い、夜の空気は脱皮した後のように気分を一新させる。

沿道にポツポツと並ぶ外灯、光の点線は、曲がりくねった坂道を、夜闇の中を這う蛇のように浮かび上がらせていた。

もとより山の中に建つ学院。

その広大な敷地の、実に半分以上を坂道が占めると言っても過言ではない。特に近年新しく建てられたばかりという新校舎は、新たに山肌を削って更なる高みなどを目指してしまっている。少しは毎朝せっせと徒歩で登頂する生徒の身にもなつて貰いたいものだ（センコーは車なのだ）。
砂利を踏むような自分の足音。

それ以外には物音ひとつ無い、静かな夜道がしばらく続く——

ぐるりと、迂回するように坂道を曲がった。
見上げる先の夜空、雲が途切れて。

坂の上に目指す校舎が姿を現す。背後から月の照らすその姿は、まるで月光館とでも言うような幻想をおれに抱かせた。

〔今夜はテツヤ、カクテイかな……〕

重い足取りで「ハア……」と、素直な心境のためイキ。

今までサボっていたツケとは言え、何も故意に問題をしなかつたワケではない。おれはただ待ちわびた連休、カレンダー上に連なる赤色の日々を邁進するの忙しく、それで宿題のことなど遥か忘却の彼方へと追いやられてしまつて——するともう、そんな無粋なモノは綺麗サツパリ、頭の中から完全にデリート。デリケートに塵の一つも残さず抹消されてしまつていたのだから——それはもはや記憶喪

失と何ら変わらない症状なのだ。

……
ゆえに

宿題を提出できないことに対して、おれ自身には一切何の咎も無く、従って放課後の居残りというペナルティーから、おれは除外されて然るべきなのだっ！

……などと。

くだらないヘリクツを並べ立て捏ねくり回してみたとところで——自己弁護にすらならない説得力の無さだった。

「……………」

そんなしよーもないことを考えているうちに校門前。生徒の間では『マリア像』と呼ばれている銅像の前までやって来ていた。

この銅像、彼の有名な聖母マリア様のモノ——ではない。そこには似ても似つかないオバサンが一人、毎朝登校してくる生徒たちに不気味な笑顔で呪いを振り撒いている。なんでも学校の創立者の一人

で、その名前が『真里亜』であるという事から、そんな名称が付いているのだとか。

おれはその、マリアさんが見てる、前を通り過ぎて。

道沿いに立ち並ぶ庭木を横目に眺めつつ、昇降口へと向かって歩いていく。

それはいつもの習慣で、完全に無意識のうちの行動であったのだが……

〔この時間、もう昇降口は完全に閉まっているんじゃないか……〕

と思い至ったときにはすでに遅く。閉じられている扉の前まで来てしまっていた。

「うーん」と一秒にも満たない思案。

ココまで来た序でだ。

おれは悪足掻きとばかりに、閉じた扉を押してみ
る——
軋キツキツ**ト**ツラ

しかし、施錠された扉は無慈悲にも、時間外来訪者であるおれのことを頑なに拒み続けるのだった。

「ああ……閉まってるよな、フツ」
仕方なく踵を返す。

この時間……校内に入れるとすれば、それは職員用の玄関からだけだろう。ならばココから一番遠い北校舎、事務館の方にまで回らなければならない。……ちよいとメンドーだ。

職員用の玄関には煌々と灯りが点いていた。

さしたる問題もなく、しかし要らぬ音だけは立えないよう、扉を少々開けて、その細いスキマから「ずりり」とナカへ滑り込む。

入り口脇に設置されている靴箱を覗くと——まだ残っている教師の靴がポツポツと目に留まった。

「脱いだ靴はどうする……」
近くにあった来客用スリッパを拝借。緑色をしたソレに足を入れると、自分の靴は靴箱の隅、未使用

の空いているところへと突っ込んでおいた。

顔を上げて正面を見る。

行く先は闇の蹲る廊下——
水に溢した墨のように、空気に溶けた夜が漂う。

物言わぬ校舎の中を歩く。

そこは闇と静寂を閉じ込めた通路、ホラー映画にでも出てきそうな夜の病院——そんなイメージを抱かせる雰囲気だ。足元を照らす光源など気休めに等しい。外から差し込む光は臙げで頼りなく、先行きの不透明な進路は暗い影を落としている。

北校舎から中央校舎へ。

二階の連絡通路を渡って学習館へと入る。

左右には電灯の消えた廊下が。

闇の奥へ消え入るよう——通いと幽かに延びていた。

ひとりで季節ハズレの肝試しをしているような気分だ。

ペタペタと床を踏むスリッパの音だけが響き、背後から張り付くようにピツタリと付いて来る。ために立ち止まってみたら、足音が一つ余計に増えていた——なんてことが、ホントにホンキであるかもしれないよーな雰囲気。

教室三つ分の廊下を進んで右折。

進む先には段々と積み上げられた段差。薄暗い中の階段は、それだけで数を増やす怪談じみて見える。目的地は四階、階段を上り切ったスグ隣——

[1-B]

おれは自分の教室の前、『いちのびー』と書かれたプレートを見上げて、入り口のドアに手を掛けた。
「ガラッ！」

そこで毎朝担任の教師がそうするよう、無意味に勢い良く扉を開いてみる。教室の中からいるハズの

無いクラスメイトたちが、一斉におれの方を向いたような気がした。一步を踏み入れる前に、シンと静かな室内を見回してみる。

そこは夜、自分の他には誰もイナイ教室。

中は空気にトーンでも貼ったかのような、ぼんやりと仄暗い、灰色の背景色。

多少の難はあるかも知れないが、わざわざ電気を点けるまでもなさそうだ。光が外へと洩れるのはヤバイだろうし、ココは月明かりだけでも十分な明るさがある。

そのままスタスタと歩いて自分の席へ——

おれの席は窓際の前から四列目。くじ引きで引き当てたのは可もなく不可もなく、といったカンジの無難な席だった。ただ、気分転換に外の景色を眺めることが出来るのはイイかもしれない。

……さてと。

おれは宿題回収のため、机の横に屈み込んで、その中を覗き込む。

「暗くて良く見えない……」

さすがに机の中まで光が届くほど明るくはなかった。——が、それでも手探りで中をゴソゴソ……と、指先にそれらしき感触。無事に目的の宿題を発見する。

机の中から引っ張り出したソレは、数枚綴りのプリント。その紙面には所狭しとABCが踊っている。どうやら存外、宿題の量は相当なモノであるようだ。

「一、二、三、死……」

誤ッ? ——と首を捻る。

数えてみると——そんな数字は誤りであって欲しかったが——敵の総数は全部で九枚。……しかしまあ、ココは二桁に達していなかった分だけよしとしておこう。帰ってから早速取り掛かれれば、なんとか今日中に半分くらいは——と思ったところで気が付く。その事実には凍り付く。

なんと……敵の武装は両・面・印・刷ッ!!

コレニ因ッテ我が軍ノ士気ハ激減。

勝率ハ二割ニマデ低下シ、サラニハ敵前逃亡ノ恐れアリ……

「……………」

しかし、今さら見なかったことにすることにも出
来ず——

戦意喪失、意気消沈といった感じで、情けなく立ち上がるおれ。

今日コレを持ち帰ったところで、果たしてどれほどの戦果を上げることができるのか……もう、放課後の居残りにはほぼ確定、と言ってもいいかも知れない。

「——ハア……」

なんて憂鬱なタメ息が口から零れた。それは氷河のように時の流れを止めた教室、夜の閑静、空気

底へと沈殿していく——

暫し、その場に棒然と立ち尽くした状態。

おれの周りには机だけが薄闇に静んだように並び

——教室は意外とちっぽけな空間に感じられた。

コレだけ静かな教室を眺めることなど滅多に無い。

どんな時でも大抵クラスメイトの一人や二人は残っているし、そうでなくても外から何かしら物音が聞こえてくるものだ。

それらが今は一切無い。

そんな無音の静寂が、毎日通っているハズのこの場所を、まるでおれの知らない別世界のように感じさせる。

“ポツン”と独りで立ち尽くす。

其処は密かな——ヒトの失われたセカイ。

“伽藍”とした空洞。

仄かな光に誘われて。

おれは自然、窓の外へと振り返る。

空から降る。蒼白い光の粉

それは舞い散る雪華の如く

降り頻る月の輝きは、このセカイを燃やす様

——誰かが言っていた気がする。

学院の屋上から見下ろす夜景は、この街一番の絶景なのだ。

「……………」

せつかく夜もこんな時間に、学院くんだりまで出て来たのだ。ちよつち寄り道道草食って、その絶景とやらを一目見たとしても、バチなど当たりはしなだらう。

おれは教室の壁、アナログな時計に目を呉れる。

その針はちょうど、七時になるところでチカラ尽きていた。

教室を出て階段へと向かう。

いつもならココから下るだけの道程だが、今夜は上へと昇る道のりを選択する。

普段は踏み入ることの無い領域へ。

見上げる先、踊り場の窓からは、外の光が目に見える。

屋上へと続く階段には、階下には無かった星の明かりが流れ込んでいた。一段上るごとに輝きを増していくそれは、先に広がる絶景への期待を否応なく膨らませる。

階段の途中。

おれは一度、足音を止めた。

立ち止まって、顔に掛かる蒼光、踊り場の窓から、天に浮かぶ月を見上げる。

夜闇に刻み込まれたような、そのカタチ。

瞳に射し込む斜光は、月影のセカイを現すよう。

——— 背景

蒼い炎が 天から雪の様に降っていた

「……………」

見上げた空から視線を戻す。

窓から室内へと振り返れば、そこには床を這う自分の影。モノクロームな世界が目映る。

おれは再び階段を踏む。後は静かに、その音だけが残響した。

一回り階段を上がると、屋上へと続くスペースに辿り着く。

六畳？ ほどの空間。

隅の方には使われなくなった机や椅子、段ボール

などが積み重ねて置いてあり、そこは物置然とした
 雰囲気^{フキ}が漂う。

その奥に——重く、伸し掛かるような扉。

おれは屋上へ出るために、その鉄扉へと進んでい
 く。

歩くだけで反響^{エコー}、周囲に籠る足音。

夜の陰溜りを踏んで、おれは重厚なドアの前に立
 つ。

この向こうに広がる夜景を想像して、同時に、こ
 んな夜遅くに校舎の屋上へ出るといふ、僅かな背徳
 感にも気持ちが高揚する。手を掛けたステンレスの
 ドアノブは、ちょうど体温を感じさせない握手のよ
 うに冷やかだった。

〃右回転〃

力を込めて。押し黙ったままの出口を扶^{たす}じ開ける。
 肩から全身、体全体のチカラで、重い鉄扉を外へ

瞬間、旋風^{つむじ}を画^{えが}いて吹き抜ける風！

セカイは開けて——

今宵、屋上は天壤を包む風景^{けいせき}に溺^{おと}れていた

陽の光を湛^たえる月。

其処^{そこ}から溢れた輝きは地上を濡らし

其処^{そこ}から零れた雫が夜に散^ちっていく

降り注ぐ蒼光は雪のように儂^{おと}く

天との境を淡く燃^もえ上^あがらせて幽玄^{おんげん}た

夜の静寂に沈^{しず}む世界——

見上げる空は星々へと至る。

それは濁りの無い

闇の中でも透き通るような大気

屋上^{やうじやう}より見下ろす街の灯火

ネオンの煌^{きら}き、文明の光は僅か

彼方^{あつち}より届く、星の数にも満たない

その瞬^{ゆがみ}きは時を超えて——

天球を舞う星座たちは、遙か太古の神話を謳う

風ぐように過ぎて行く、透明な夜気が頬を撫でた。
その感触、新鮮な肌触りが、甚く心地いい——

おれは小さな箱の出口から、外の世界へと一步を踏み出した。

剥き出しで広がる、足元は平らなコンクリートの大地。

周りには「ぐるり」と、屋上を切り取るように鉄柵が張り巡らされている。

後方には給水タンク。

扉のすぐ横には、出てきた小部屋の上へと登る梯子が据え付けられていた。

屋上を形作るパーツはすべて、普段と何一つ変わらない日常。

それでも周りの景色、訪れる時間が違うだけで——
——こうも世界は異質に映るのだろうか。

それは瞳に映る儂き陽炎

夜闇に浮かぶ、月に愛でられた方舟の縁

そこには髪を広げた少女が一人、月を望むように立っていた。

+

〔学院の制服を着てる——？〕

しかし、それは見たこともない美少女だ。

それも劇的なくらい、飛び切りの美人。

背後の夜景が霞むほどの、超然的な美しさがそこに立っている。

「……………」

——暫し、絶句した。

その姿を形容する言葉が見つからない。比喩の対象を持ち得ない、美しさの最上級——否、それ

は比較することすら敵わない。

月夜に佇む、ひとりの少女。

男にしては小柄なおれと、それほど変わらないくらい的身長だ。

その傍らには、身の丈ほどもある筒状のナニかが、女のコの左腕に沿うようなカタチで立てられている。

〔望遠鏡？〕

——にしては、ずいぶん起伏に富んでいて凹凸が激しい。それはもつと攻撃的な、別のナニかを連想させる。

“——！！”

不意に差し向けられた彼女の視線——見ていたおれに気が付いたのか。

それまで月と正対していた少女は、「沙らり」と、豎琴を奏でるような仕草で、おれの方を振り向いた。

微風に舞って髪が流れる。

それは月の光に照らされて、煌く水面のように夜空に映えた。

おれはその少女と正面から向き合い、そして

「……………」

——その姿に魅せられた。

…

光の粉を浴びて輝く髪。

雪のように白く、透明な肌。

柳眉の下には、鈴のように円い目が。

その奥には、透き通る水晶の瞳を宿している。

整った鼻梁。

鮮やかな朱の差す唇。

そして細く、しなやかに伸びる肢体——

それらの全てが、美の理想を追求した、ヒト型をした美しさ。

精緻を極めて造り込まれた、聖物足りうる活人形。その造型は決して偶然を許さず、全ては必然的に

創られた、美術の極致を体現している。

其は正に神の業、

究極の美神と呼ぶに相応しく——

——その刹那。

一陣の大風、逆巻く神風が吹き荒れた。

張り裂ける大気の慟哭。

屋上を囲い、天へと巻き上がる風塵。

その中心を貫く閃光——夜を裂いて翔る軌跡に。

目を開けていられず視界を閉ざした。

顔を覆うように両手を翳し、上着を泳がす突風と

拮抗する。

空気を震わす鳴動。

身体も吹き飛ばされそうな、光と風の奔流に飲み

込まれる。

それは爆発のように迸り、夜を闇ごと払拭した。

轟、と響いた衝撃の痕——

やがて衰え、過ぎ去る疾風。

視界は晴れ、煙幕のようだった粉塵は霧散する。

閃光は一縷の輝き。

月より零れた、一筋の雫となつて地上に墮ちる。

それは宇宙より舞い降りた天使の様。

天の羽衣、夜空の限り、天涯全ての輝きをその身に纏い——

——其処には翹を上げた少女が独り、
月に臨むように飛んでいた。

：

彼女の姿に魅せられて、その美しさに囚われた。

静う術など何も無く、彼女だけを見つめ続ける。

「……………」

不意に——セカイが明るくなった。

天上の月からは幽かな遮りも無く。

見下ろす光が少女を照らす。

彼女は其の方を振り向いた。

真正面からその姿を捉える。

大氣に幻影を刻む奇蹟。

その背に宿した光の翅は、虹色の軌跡を、夜の帳に画いてゆく。

降り頻る月光の最中——

それはゆつくりとソラより、コンクリートの大地へと降り立つ。

舞い散る光の粉が蒼く輝く。一步二歩と足音が近づく。

彼女の視線が中てられる。ただそれだけで動けない。

自身の体は動かない。自分の意識は此処には無い。だから……それはまるで、夢でも見ているかの様に。

その唇は、何の自覚もなく動いた。

自動的に——

紡がれた声に言葉は無い。

恐らくは疑問符さえ付かなかった、それはただ、

口から吐き出されただけの衝動——

「」

+

「彼女はいったい、何者なのか……?」

疑問は声を出す暇さえなく。

それは眼前に突きつけられた「ナニか」によつて止められた。

円い穴を覗く、筒状のナニか……

その穴が銃口であると気が付くには、少しばかり彼我の距離は近すぎたと言えるだろう。

長大な BARREL を持つ、銃器の規格すら超えているその RIFLE を。

少女はブレることなく水平に、その片腕の筋力のみに支えきっている。

伸ばされた銃身の先——

眉一つ動かさずに、静なる美貌が其処には在った。彼女の瞳に殺意はない。

情けも、容赦も、憐れみも——どんな感情も存

在しない。

含む意志のない透徹。

ただ純粹な——見るといっただけの機能。

機械的で無機質な。

雑じり気のない生粋の。

だから……それ故に美しいのか。

少女の唇が開く。

可憐な花弁の隙間から、零れ落ちる soprano の音。

「わたしは——

黄金と響く、静謐なる夜想曲。

それは感情のない monotone……

「わたしはトーマ——

突きつけられた銃口と共に。

最後の銃声は、殺されるように美しく。

「わたしは閻魔。……を殺す、サツジンキ——」

【Introduction / Pandora】

§

——月の照らす夢を見ている。

それは霞のような記憶の中で、夜を塗り替える光に包まれていた。

身体を攫う、風の衝突。

闇を吹き飛ばすように荒れ狂う大気。

震えるような、ソラの慟哭。

漆黒の彼方、一縷の閃光が流れて。

ホシより零れた雫が、涙のように屋上を濡らしている。

“其処には■を広げた少女がひとり——”

——月の映す幻を見ている。

それは不確かな記憶の中で、一つの幻想を見つめていた。

星空を纏う、絶対の美少女。

光を織り込んだような髪と、雪のように白い肌。

小振りな顔は乙女の容姿に相応しく、

四肢の造型はこの上もなく美しい。

歩む軌跡が虹色に輝く。

視界を穿つ孔。

向けられた瞳の奥——

どこまでも透き通る、無色の心に溺れるよう。

それは月夜に浮かぶ少女の幻想。

目の前に降り立つ、■を広げた天使は残酷に。

殺戮を謳う、虐殺の聖者を口にする。

“わたしは——”

——殺人鬼。

その一言が、悪夢のような自分を呼び覚ます……

…

…ねえ、ちゃんと聞いてんの？

■ 壱

「——ねえ、ちゃんと聞いてんの？」

…：間隔五センチメートル。

呼吸も重なるその距離に突き出された顔。

今にも触れそうな位置に迫った唇。

眼前に聳える鼻と、形のよい大きな瞳が目に入る。頬を撫でて揺れる、黒髪のショートカット。

それと対になって映える、雪原のような美白。

不意に聞こえてきた声に振り向くと——そこに視界を埋め尽くす和泉の顔があった。

…：一目で不機嫌と判る表情をして。

「………聞いてくる沈黙」

傾き45度の攻撃的な眉。訝しげに顰められた眉間には三本、ご立腹の縦ジワが怒りも露に起立している。眦を吊り上げた大きな瞳には非難の色を滲ませ

て—— ナナメ下から睨み上げてくる視線は、おれを射殺するような必殺の上目遣い。拗ねた3に尖らせた口元は、開かれずとも嫌嫌の悪さを雄弁に物語っている。

「……ゴメン、聞いてなかった」

「あのねえ——」

表情一変、呆れたように一言。

おれが意外なほど素直に謝ったからだろうか。和泉は毒気を抜かれたように呟いて——それから「ハア……」と一際大きく。肩まで下げて吐き出すような溜息を漏らした。

早朝、ホームルーム前の教室。

連休明けで積もる話でもあるのだろう、周囲はクラスメイトたちの喧騒で騒がしい。

そんな中でおれは窓際、自分の席で頬杖を突きながら——外の景色へとボンヤリ、視点を彷徨わせていた。

……ドコにも焦点は合わない。

ただ目に映り込む光景と、脳裏に浮かぶ記憶が、意識の中で混濁している。

陽の照らす風景と、月の見せた幻影——

昨夜の出来事。

「アレは夢か、幻か……」

おれは昨日の体験を、それが実際にあった事なのかどうか、未だに信じられないでいた。

何度も追想する。

それを現実に見華させようとするかのように、頭の中のイメージを幾度となく再生し続ける。

深く自分の中に潜り込み、それは微睡に墮ちるように、おれの意識を不確かにする。

半分夢見心地で、白日夢を見ているように上の空。まあ、よーするに——

「あんた、今朝はどうしたのよ。教室に来るなりずーっとぼーっとしててでしょ。……連休中に何かあ

った？」

——ぼーっとしていた。

「ベツに。何もないケド……」

嘘だ。

歯切れの悪いセリフ。微妙に上擦った感のある語尾。

自分でも不思議なくらい、気になることが昨日あったクセに……

すると和泉はじい~~~~~と、間違い探しでもするかのようには、おれの顔をマジマジと見つめてくる。

その間隔、顔の距離は、心臓が「びクン！」と跳ねるほどの接近——

「ふくん。それ、ウソね。何か気になるコトがありマス——って、思いつつきり顔に書いてあるわよ」

「そ、そんなことねエーよ。勝手にヒトの顔をそー

ぞーするな」

「なア〜に言ってるのよ。あんたの表情が判り易すぎるだけじゃない」

和泉はそう言うときさらに顔を近づけて——ジロジロと値踏みするような、不躰な視線を向けてくる。

和泉とはかれこれ十年近く付き合ひのある腐れ縁。人間関係のカテゴリーで言えば、幼馴染なるモノに分類される間柄。

「なんだよ……そんなヒトの顔をジロジロ見んなよ」

とは言っても、不用意に顔を近付けられれば緊張ぐらいする。おれはそんな自分の気恥ずかしさから眼を逸らすよう、面舵いっばい、フイと顔を横に背けた。

「……」

——のに。逸らした先には、回り込んできた和泉の顔がある。

「……」

おれは無言のまま取舵いっばい——が、再び目の前には和泉の顔。

「その態度、なア〜んかアヤシイわねえ」

和泉は三度、おれの顔を覗き込んで来て——そんな一言。

顎に手を当て、探るような視線でおれを観察してくる。

「沈黙で耐え忍ぶ」

おれは昨夜の出来事を、他人に無闇に詮索されなかつた。他の誰かに話してしまえば、そんなモノは夢だったのだと、簡単に片付けられてしまうような気がして。

だからおれは今度こそ、和泉の詮索を断ち切るため、首だけでなく身体ごとを窓に向けて座り直した。そして机の上に頬杖を突くと、視線を外の景色へと放り出す。

「……何よソレ、その態度。ヒトがせっつくかく、あんなみたいなのを心配してやってんのに——あた

しの親切をそんな無下に扱ってもイイわけ？」

そんなおれの態度にカチンと来たようだ。和泉はトゲのある言い方で、チクリと口撃を加えて来る。

……しかしまあ、言うに事欠いて『心配してやってる』とは。

「何をエツラソーに……」

内心愚痴るおれ。

「なによその顔。なんか文句でもあんの？」

……お前は目が合っただけで因縁をつけて来るチンピラか。

和泉はここにきて本性も露。

平素は防具のように「スッぽり」と被っている美少女仮面も、今はみごと剥がれ落ちて——粗暴な性格をさらす剣道少女。

「黙って大人しくしている分には、少しくらい可愛いと思わなくもないのだが……」

一旦口を開けば粗暴な言動。現在もおれに向けられているのは、ジト目の視線。眉間に突き刺さるよ

うな、半眼の眼突き。

いつもよりちよっぴり悪かっただけの機嫌が、ココに来てさらにナナメ^{うえ}へと急上昇、一段と悪化してしまつた模様。チラリとおれが視界の隅に捉えたモノは、そんな心理変化を視覚化しよう、傾きを大きくしていく右^あがりの眉。オマケにそれは陸揚げされた魚のように、^{ピクピク}と震えてま

でいる。コレはもう、目に見えて明らか。

和泉サマは確実に^ご機嫌ナナメでいらつしやる

——と。

^{逆水平チョップ}
ずひっ!

^憤——という掛け声付き。和泉はダルマ落と

しのように、頬杖を突いていたおれの腕を^な薙ぎ払つた。

「魚^{うお}っ——」

すれば必然。

支えをなくした頭部はそのまま、重力に従い机の

上へと落下する。ガタンと派手な音まで立てて——おれは肩から崩落、思いつきり体勢を崩された。

「てめエ！ イキナリ何しやが——」

それはおれが反論しつつ、^よリ^りと上体を起こしていた時、

^{突まれる頭}
ガシッ!

コメカミをサンドイッチ。両手でロックされる頭部。

女の^コにしては分厚い掌が、ギリギリとネジを回すみたいに、おれの首だけを回転させる。強制的に窓側から正面へと曲げられる。

^{クワクワ}
^{クワクワ}
回転頭部^{クワ}

「痛いゴおッ——!!」

90度を超えてまでヒトの首を捻るバカ力。

……ならばそれは必然。

体もそれに引っ張られるよう——窓から正面、和泉と真正面に視線を交わさざるを得ない。

向かい合ってお見合い、

「……………」 慥然としたおれ。

vs.

「……………」 探りを入れて来る和泉。

〔画面いっぱいの和泉。〕

おれは首ごと視点を固定されていて、目を逸らすことは1ミリも不可能な状態。病気ではなく物理的な視野狭窄。真正面にはいつになく真剣な和泉の双眸が——ただし、その見据える先は、おれにとつて決まってよからぬことなのだが。

カメラ視線

レンズのような瞳が、おれの顔を凝視してくる。

……コイツは、幼少の頃から剣道一筋だった。

周りを道場の無骨な大人たちに囲まれて育ったためなのか。性格は存外凶暴で男らしく、その容姿は少女の上に美をつけても異論のないほど整ってはいるのだが、女のコのような可愛らしさよりも、男っぽいカッコよさの方が先に立つ。

全国津々浦々。各学校、各学年に必ず一人ぐらいはいるであろう、勝気で男勝りな女のコ（暴力的なのがタマにキズ）——それが今ちょうど、目の前でおれのコメカミを締め付けている怪力オナナ。しかし、それでも外見だけは黒髪の似合う乙女なのだった。

「ふむ、やっぱりどこかへんね。今日のあんた……」
首を傾げるようにして、和泉はそんな感想を洩らす。すると、

漸近してくる顔！

和泉は気難しい表情——眉をハの字に、口をハの字にヒン曲げて、瞳の中を覗き込むよう、急に顔を近づけて来た！

室内競技らしく、日焼けとは無縁の白い肌が……

おれは思わず離れようと、首を後ろへ——

〔うっ……動かナイっ!?〕

強すぎる縛め。

和泉の両手は万力のようにコメカミを押さえつけ、

おれは「びくり」とも動けない状態。

さらに近づく和泉の顔。

額がくつつく手前、鼻先までも触れそうになる寸前。

褐色の虹彩、睫の本数まで数えられそうな——

唇までもあとわずか……

それはハタから見れば、XXしているように見えなくもない……

最大瞬間接近——間隔、二センチメートル……

「……………」

「……………」

向かい合うこと約六秒……

和泉は急に得心のいった顔付きになり、パツとコメカミを押さえ付けていた両手を離した。それでおれはようやく無意味な緊張から解放される。

「はっはあゝん——さては、」

「げっ!？」

その表情は——和泉がロクでもないコトを思い

ついたときの顔。

気難しさを一変。

への字からニヤリと吊り上げた口元は、悪戯好きな小悪魔のそれに似て恐ろしく、

「それって恋わずらいね。連休中にヒトメボレ、気になるあの娘でも出来たとか？」

椰揄するような和泉の声と共に。

そのとき同時に聞こえてきたクラスメイトの声に、おれは不自然なほど動揺してしまった。

『昨日の夜また出たらしいよ。例のサツジスキの亡霊が——』

「——フラッシュユバック。」

脳裡を過る、トーマと名乗った少女の幻影

「……………」

——凶星、言葉を失う。

「えっ?! うそ……それってホントに? ——あ

たし、ジョーダンで言っただけなんだけど……」

自分では見えない。

だけど正面、僅か二センチほどしか開いていない距離。目の前で円く見開かれた和泉の皿のような瞳には、小さいけれども隠すことの出来ない動揺が映って——

「いや、そもそも……」

本来隠すようなことなど、何もないはずなのに……

おれは努めて表情を険しく、惘然とした態度を装って姿勢を正す。

「そ、そうそう——ジョーダンだよ、Jordan! 当たり前だろ、そんなの。いるワケないって、気になるあの娘なんて」

誤解すんなよ、と。言ってて虚しくなるほどに。

和泉は全く聞く耳ヲ持タ不——そんなおれの言葉を一笑に付した。

「——嘲笑」

それは見れば惚れ惚れするほどに。完全無欠にヒ

トを小馬鹿にした表情。

「何を今さら——そんな強がりも言ってもムダよ。すでにその明らかに不審な『どーよー』が、全ての真相を物語ってるわ。さっさと白状した方が身のためだと思っけどお?」

ニッコリ笑顔で脅し文句。

その瞳の奥では、ドス黒い魂胆が蛇のように渦巻いている。

そう、イマまさにこの目の前で——悪魔の微笑を湛える生粋のサディストが目覚めつつあるのだった。ヒトのことをからかってオモチャにして弄ぶ気満々の、魔女、誕生!

「ち、違うぞっ! そんなの断じて違うからなっ!」

おれは語気を荒らげて訴える。

「だいたい『どーよー』つつたつて、そっちがイキナリ顔を近づけて来るからだろーが。あんなことされたら、誰だつて少しは動揺するモンだぞ」

「あら。それってトーヘンボクのあんたでも、よー

やくあたしの魅力に気が付いたってコトかしら？」
 「んなワケねエーだろ、気持ちワリい。そうやって
 ヒトの揚げ足を取るような言いがかりで、難クセば
 つか付けて来んなって言っただよ。だいたい昨夜
 のアレは——」

現実だったのかすら疑わしい。

——例えばそれは夢のように。

あまりにも美しすぎた少女は、ありえない空想の
 出来事だったのかもしれない……

が。

うっかり口を滑らせた！ と気付いたときには、
 もはや手遅れ。

「不ッ不ッ不ッ—— ついにポロを出したわね」

和泉の声が、おれの耳にはそんな不吉な笑いに聞
 こえた。

「昨日のアレって何よ。おねえーさんにも判るよー

に説明しなさい」

言っイスマて魔女の微笑が嗜虐しぎやくに染まる。おれは一瞬に
 して身の危険を感じ、逸早いちはやく無視を決め込もうと顔
 を逸らす——

「逃がさないわよ！」

ガシツ! と再び。

両のコメカミを押さえつけられ、頭部を微動だに
 すら出来ないおれ。

その両手が拷問器具のように見えてくるのは、お
 れの単なる気のせいだろうか……？ ぜひ錯覚であ
 って欲しい。

「ホラ、早く……さっさと吐いて楽になっちゃいな
 さい。——でないとオ……」

頭痛ずつうう！ メキメキと締め上げてくる圧力が激痛

ッ——!!

「い痛イ胃イイツ——!!」

悲鳴を上げてな哭く頭部。

同時にピシツと音をツキ立てて。

ヒビ割れたガラスのような、網目状の亀裂が視野を駆け巡る。

それはおそらく……自分の頭蓋が碎けるイメージ。ヤバっ、ホンキで死ぬかもしれない——そんな覚悟が一瞬、脳裏を掠めて過ぎった刹那、

「なんだオマエら。れんQあけて、さっそくッふーふげんか”か？」

後ろから能天気な、ひらがなばかりのセリフが降って来た。

……いや、コイツはバカそのモノだ。

目の前でおれが、和泉から拷問にも近いイジメを受けているというのに、それはなんとも緊張感に欠ける声。軽く世間話でもするような感じの、おれの痛みなど僅かたりとも理解しない、全くいつも通りの澄ました感じの声音なのだった。

「あら。おはよー、マリヤ」

こちらは何気なく、朝の挨拶を返す和泉。

すると、パッとコメカミに突き刺さっていた圧力が消える。

同時に空中へ投げ出された頭部。

ストン——と、そのまま自由落下。机の上へと

垂直降下。

「おー」
「御沈！」と強かに下顎を打ちつけた。

マリヤは片手を上げて和泉の挨拶に応えている。

二人ともおれのことを間に挟んでおきながら……コレを完全に無視する格好。マリヤは顎を押さえて痛がるおれのことなど、全く気遣う風もなく、そのまま何事も無かったかのように自分の席（おれの隣）に腰を下ろしている。

「あのな、マリヤ——お前はこれのおれの不遇な扱いを目の当たりにしてもまだ、”ふーふげんか”なんて戯言が言えるのか？ 良く見てみる。おれはここまで一方的にやられてるんだ。コイツはもはやケ

ンカと呼べるようなレベルじゃない。イジメだ。家庭内暴力だ。立派なドメスティックバイオレン

——」

「勝手にふーふ扱いするなッ!!」

『ボクシャップ』
『鉄拳制裁!』

「——酔……」

スッ——と魂が抜けるように。

おれの意識はFly away……空の彼方へ飛んでいく。

練り出された和泉の鉄拳は、イヤな音を立てておれの顔面へと減り込んだ。

それは慣用ではなく文字通りに——鼻っ柱をへし折る暴挙だ。

「朝からゴークイだな、イズミ」

「コイツがバカだからよ。ぼーっと鼻の下なんか伸ばして——ヒトの話なんてまるで聞いてないんだから」

和泉は蔑むような視線で言い放つ。

「ハナのシタ？」

「ゴカイだからな、マリヤ。和泉のいうことなんて

真に受けるなよ」

「ナニが誤解よ」

間髪容れず。和泉は条件反射で吠える犬のように口を挟んでくる。

「そうだ！ ねえマリヤ、あんたも知りたくない？

——ユウちゃんの気になるあの娘」

「……ぐはっ!」

や、止めてくれ。その渾名を呼ばれると——おれは面映くなつて、全身がコーチョコクしてしまうのだ。

「うーん、それも気にはなるが……」

マリヤは考える素振りをしながら——チラリとこっちの方を見てくる。

和泉がおれのことを『ユウちゃん』なんて呼び始めれば……それは赤色灯るピンチの印。持ちつ持たれつの腐れ縁な関係が長く続いていただけあって、

そこんとこを分かっているマリヤは、こうなると基本こっちの味方をしてくれるのだ。

おれは首を細かくバイプレーション。左右に振るつづ必死にアイコンタクトで、そ・ん・な・の・デ・タ・ラ・メ・だ”——と。

「それよりも——今のオレにとっちゃ、こっちのほうがシカツ問題なんだよ」

アイコンタクトが通じたか。

一度コクンと頷いたマリヤは、和泉から振られた『おれの気になるあの娘』などと言う、根も葉もないデタラメなどには食いつかず、その何も入っていないような薄っぺらな鞆の中から、ヒラヒラと数枚綴りのプリントを引っ張り出した。

「それって……英語の宿題じゃない！」

うわあー、なんて悲惨な声を上げる和泉。

そりゃ驚きもするだろう。

何しろソレは連休前から提出できなければ放課後居残り”と、【死の宣告】を受けていた呪いのア

イテム。

昨夜マリヤから来たメールはおれの予想通り、白旗を上げた敗北宣言だったようだ。

「ご愁傷様。……まあ、せいぜいガンバんなさい。英語は午後からでしょ。それまでになんとか終われば助かるんだから」

戦地へ赴く兵士を見送るよう、和泉は同情しながらマリヤの肩を叩いて頷く。

「ちえっ、ヒトごとだと思いやがって」

コレだから優等生は——などと。

マリヤはカレンな言い回しで、逆恨み以外に解釈しようのない感想を洩らす。

まあ、そこはマリヤの自業自得、仕方のないことではあるのだが——今回に限り、それはおれにとっても同じことなのだつた。

「ハハッ……マリヤ。今回はおれも、お前と一緒に居残りすることになりそうだ」

「なにっ!? やっぱリオマエも終わってなかった

か！ 昨日メール返ってこなかったから、もしかしたら裏切られたかもしれない、と思ったが——うん、やはり持つべきものは類友しんゆうだな」

常に定期試験の慰み者、学歴社会の底辺を肉体派で生き抜いて来たマリヤ。本来ならばそんなヤツから類友しんゆうなどと呼ばれたくはないのだが——

「悪いな。昨日お前のメールを見てから、宿題を学校に置きっぱなしだったの思い出して。それで、取りに来てたんだ」

「机トを指トで叩トく」

「ココまで？ いや……でもまあ、オレでもそうするかも。忘れたらナビTに怒られて居残りだもんな」

——まあ、それも本日限りの友情ということだ。「今回だけはあるがたく頂戴しておくか……」

そんな諦めの気持ちで、おれがマリヤと共に居残りを覚悟しようとしていた矢先のこと。

「ちよっと！ 英語の宿題、あんたも終わってなかったワケ?!」

悲鳴にも近い声が上がったのは前の席から。

和泉は血相を変えておれの肩を鷲掴み。マリヤの方を向いていた顔を強引ゴライシに自分向きへと変えてしまおうと、「ああ」と短く肯定するおれに向かつて、

「どーしてくれんのよッ!! あんたが居残りになったら……あたし一人で行かなきやいけなくなるじゃないっ!!」

何だか舌を噛みそうな、皆目見当も付かない言いがかり。

おれはさっぱりワケのワカラナイ非難を浴びせられる。

「——ンだよイキナリ。おれが何したって言うんだ?」

突然の事態に対し、当然のように口を衝いて出た疑問——だったのだが。

それは見事に大型地雷、触らぬ神に祟られてしまったような感触。

八の字反転——一瞬にしてV字へと逆立つ眉。

和泉は眼光鋭く、おれは蛇に睨まれた蛙のように動けなくなった。

「あんたがつ、ぼーっとして！ 話聞いてなかったんでしょッ!!」

怒りを圧縮した重低音。

暴発を押さえ込んで——それでも隙間から漏れ出て来てしまった、爆風のような迫力だった。

「うっ……それは確かに。そー言われると、イイワケしづらいものがあるな」

確かにぼーっとしていて、和泉の話を聞いてなかった非はおれの方にある。

しかし、そんな暴風のような怒りを振り翳された状態では、まともに面と向かって話も出来ない。

「わかった。今回はぼーっとしていたおれの方が悪かった。このとおりあやまるから。だから決して怒らず、怒らず、そして殴らずの精神でもう——」



「——イチドオ……」

おれのセリフは、脳天に振り下ろされた和泉の拳で、グシャリと頭蓋ごと破壊。スクラップにされて机の上とうつ伏せで倒れる。

おそらく上からでも見下ろせば——それはペシヤンコにされて引き伸ばされた、ヒキガエルのように見えたのではないだろうか。

「オイ、大丈夫か？」

隣から聞こえる、暗闇の中で気づかう声はマリヤのモノ……？

「フン——これで少しは目が覚めたんじゃない。自業自得、あたしの話を聞いてなかったんだから、これくらい当然の報いよ」

机に額を貼り付けて……視界は平らな二次元のた

だ中。

そんな状況で見えるはずもないのだが、何故かそこには腕を組んで蔑む視線。侮蔑も露におれを見下ろす、和泉の姿が目には浮かぶよう。

「ナニいつまでもそんなカッコで寝てんのよ。」

——ホラ、さっさと起きなさいよ！」

クレーンゲーム宜しく、髪の毛を掴まれて引き上げられる景品^{オレ}。

「……………」

抓まれた猫のような状態。もしくはカツアゲされている善良な一般市民だ。おれはこの不当な暴力に異を唱えたい。

抵抗するように不満顔で三秒^{にらむ}。

するととりあえず手を放されて解放された。

——**ドスン!**^{墜落}

おれはムリヤリ引き抜かれそうになった頭髪を労わってやる。

「……で、話ってなんだよ。おれが居残りになると

何かマズいこともあるか？」

「あるのよありまくりよおおアリよっ!!」

早口言葉みたいに捲くし立てる和泉は、机を両手で叩いて。身を乗り出して顔を近づけてくる。

「いーい。もーいちどだけ言ってあげるから、今度は耳の穴カッポじってよお~~~~~聞くときなさいっ！」

あたしはね、今日は剣道部が休みだから、あんたに付き合っって新聞部に行っってやつてもいいわよっつて言ったの。それなのに肝心のあんたが居残りで、今日は新聞部に顔を出せない、なんて事になったら、そんなの本末転倒じゃない! このあたしの親切心をいっただいどーしてくれんのよっ!!」

「いや……ベツにそんな無理してまでおれに付き合わなくても——そんなに部活行きたいなら、お前一人だけで行けばいいじゃないか。一応お前も掛け持ちだけど部員扱いなんだし……たぶん部室に居ても誰も文句言わねーぞ」

(続く)